

非存在的現象学のためのプロレゴメナ ——「生」と「反省」をめぐるフッサールとフィンク——

池田 裕輔

古来、哲学は〈驚き〉により始まるとされる。驚きという経験を幻滅といった類似の経験から鋭く区別して記述するのであれば、われわれが普段、不断に浸っている自明性が突如として理解不可能なものへと変容する出来事であるとして差し当たり許されるであろう。しかし、われわれはこの理解不能性に端的に留まり続けることはできない。驚きの経験は〈哲学の始まり〉にすぎないのであって、〈哲学の歩み〉ではない。即ち、哲学はその始まりに留まり続けることはなく、そこから一步を踏み出す宿命にある。よって、当該の哲学の〈始まりの経験〉としての〈驚き〉以上に、そこから踏み出される〈最初的一步〉こそが、その哲学について考究する際の実質的かつ決定的な導きとなると推測してよいであろう。

本論はエトムント・フッサールとオイゲン・フィンクの比較研究である。よって両者においてそれぞれ〈現象学〉という名が与えられた哲学の〈驚きの経験〉を再構成し〈最初的一步〉を捕まえることが本論の課題である。本論のような試みが意義を持つのは、例えば次の発言にみられるような〈ものわりのよい〉論争の調停にわれわれは未だ簡単には満足できないからである：

「…《現象学》とはフッサールのものでないフィンクのもでもない。しかし同時に強調されるべきだが、二人が築いた現象学の〈彼岸〉に《現象学》があるのもない。まさにこれらふたりの現象学という両極端の〈あいだ〉にこそ《現象学》は位置するのである。」(Luft 2002, 266)¹

本論はむしろフッサールとフィンクそれぞれにおける〈現象学の理念〉の違いを先鋭化し、それぞれの方向での今後の研究に何らかの形で貢献したい。両者の〈調停〉はそれからでも遅くはない。この限りで、それぞれの哲学の〈最初的一步〉を極力先鋭化された仕方でも抽出するのが本論の課題である。ところで、このような課題を遂行するためにはいくつかの補助線を予め決めておくことが不可欠であろう。ひとつはフッサールが自身の哲学的研究の為の「媒体」(Rosen 1977, 147)として要

1. この発言の根拠はルフトの著作の極めて短い結論部で示唆されているだけで、具体的な詳解はおこなわれていないよう思われる。Vgl. Luft 2002, 304ff.

請する「明証」、そして「直観」及び「視ること」という事象への彼独自の洞察。加えてその方法論的定式化としての「原理中の原理」である（第一章）。もうひとつは「現象学の自己批判」を意図する「現象学の現象学」という師の着想を「超越論的方法論」として独自に引き継いで展開されたフィンク『第六デカルト的省察』（以下『第六省察』）における二重化された「生」概念である（第二章）。そして、フィンクにもとづいて本論が再構築する、フッサールのものから区別されるべき〈最初の一步〉が、なぜ「非存在的現象学」という表題を持つこととなるのかが最後に示される。

1. ひとつの始まり～フッサールの超越論的現象学におけるエレメントとしての〈明証の一元論〉、あるいは「直観」とその「絶対的自明性」

本章においてわれわれは「明証」、「直観」そして「視ること」とフッサールが名付ける事象が彼自身の現象学の展開を決定的な仕方規定しているという作業仮説から出発する。これらの事象は、フッサールにおいて単に「主題的概念」（ある哲学において考察の主題となる概念）であるのみでなく、同時に「思考の影」としての「操作的概念」（主題化されない仕方である任意の哲学の論理展開、体系などを暗黙のうちに規定している概念）であると本論は主張する²。本章の根本主題は、フッサールがどのような仕方「事象そのもの」に取り組んだのかという問題である。本論はこれを確認するためにフッサールの「明証」理論を出発点としたい。更に彼の「明証」概念と事象の上で不可分に結びついていると思われる「視ること」及び「直観」の問題を同時に検討したい。

フッサールの明証理論には大きく分けて二つの側面があるといえる。第一の側面は、志向性の構成的機能としての明証である。これは志向と充実のシステムの問題として、言い換えれば「理性の現象学」³の問題として規定することができる。ここでは「超越論的現象学とは構成的意識の現象学なのである」（II, X）という定式を確認して満足することとしたい⁴。

第二の側面は、「明証」が超越論的現象学そのものの方法として機能している点に要約される。超越論的現象学の課題は、フッサール自身が語るように、あらゆる「自然的統覚の先所与性」（XXIV, 187）を純化すること、または「視る自己所与性（schauende Selbstgegebenheit）」（II, 50）へと還元することであり、同様のことである

2. 「主題的概念」及び「操作概念」という概念に関しては以下を参照： Fink 1976, 180ff; Luft 2002, 213f.

3. 「理性の現象学」に関しては以下を参照： III/1, 314ff; XVII, 273ff.

4. フィンクもまた、フッサールのいう「超越論的観念論」とは「構成的観念論」であることを確認している。Vgl. Fink 1966, 147.

が、あらゆる事象を「本原的に与える視ること」(III/1, 314)としての明証へと還元することである⁵。これは、現象学がいわゆる〈超越〉を遮断することを意味する。ここでの〈超越〉を、よくそうみなされるように〈実的な内在〉、や〈心的内在〉の対概念として理解することは致命的な誤りである。そうではなく〈超越〉とは「自己所与性」としては与えられないもの、あるいは「本原的に与える視ること」には与えられないものであることを意味している。この方法論的要請は明らかにある種の循環にもとづいているが、これこそがフッサールの現象学が掲げる「原理中の原理」(III/1, 51)である。現象学者は研究に際してこの原理に従わなければならない。フッサール現象学においては、研究対象としての事象(志向性の構成的機能としての明証)とその現象学的研究における方法(「原理中の原理」としての明証の要請)が合致している。この「自己関係性」こそがフッサールの現象学における要である(Vgl. III/1, 139; VI CM, 21ff.)。本論は仮にこのフッサールの現象学的方法的性格を〈現象学的循環〉と名付けることとしたい。また、事象と方法がともに明証概念に集約されていることから、これを〈明証の一元論〉として性格付けることが許されるであろう⁶。

しかしながら、この〈現象学的循環〉は単なる循環論法に陥っているのではないだろうか。言い換えれば、〈明証の一元論〉は、論証を欠いた単なる独断的な要請にすぎないのではないだろうか。というのも、本原的自己所与性としての明証の〈内在〉に対する〈超越〉という概念は、まさに当の「自己所与性」という様態では〈与えられないもの〉であると定義されているからである。ここでは、そもそもの議論の始まりにおいて〈自己所与性としての明証〉が既に前提されてしまっている。この限りでフッサールの主張は論証を欠いた独断的なものにすぎないのではないだろうか。ところが、フッサール自身は「これは全く問題ではない」(III/1, 138)という。『現象学の理念』などの議論も踏まえて要約すると、フッサールはこの問題に以下のように答えているものと思われる——もしこの明証の批判者がそもそも明証としての現象学的直観を生きているのであれば、このような問いを立てることはできない。現象学的方法はただ「自己所与性」としての「明証」のうちでのみ、つまり現象学の遂行においてのみ真正の哲学であることが証示されるのである。というのも「絶対的所与性は最終的なもの」(II, 61)だからである。このことは、現象学を〈生きる〉(遂行する)者にとって「自明」、しかも「絶対的自明性」(II, 50)である、と。

しかし、この「絶対的自明性」は単に現象学者にとって「自己所与性」や「視ること」こそが、存在構成の理性源泉であることなど〈絶対的に自明〉であると論証

5. 因みに、これら全て「理性の現象学」が掲げる要請である。

6. 「原理中の原理」という着想自身、それが「あらゆる原理 (*alle Prinzipien*)」を「(いわば唯一の)原理 (*das Prinzip*)」に還元する限りで一元論的な発想にもとづくものであるといえる。

もなく断言しているのではなく、現象学者が哲学的に自覚しつつ遂行するこの「視ること」は、現象学的還元を遂行していない「自然的態度」にとどまる人々にとってはあまりに自明すぎて全く自覚されていないということを言い表すものだとして理解されるべきである。自然的態度に留まる者はこの「視ること」、「自己所与性」の「自明性」、要するに〈明証の自明性〉に対して閉じられ、その自明性をまさに自明性として無自覚に生きているのである。一般に自然的態度に留まる人々（人間）は「悟性（Verstand）」を用いてこのような哲学的問題に取り組もうとするのであるが、現象学は実は純粋な「直観（Intuition）」によってのみ遂行されなければならないとフッサールは語る（Vgl. II, 62）。それが「悟性」ではなく「直観」によって到達可能である限りで、フッサールはわれわれに、端的に〈視よう〉、あるいは「明証」もしくは「直観」を〈生きよう〉と声高に語るのである。このフッサールの呼びかけに従わない者はそもそも現象学を始めることなどできない（Vgl. II, 61; XXXV, 477f. Fink 1966, 112）。そしてこの「直観」とは、あるいは「視る認識（schauende Erkenntnis）」とは悟性をまさに理性へともたらそうとする理性のことなのである（II, 62）。この限りで、フッサールの明証—理性論は、彼自身が自覚していたように「理性」を「直観」と捉える「神秘主義者」の「知的直観」の哲学的伝統と極めて親和的というべきであろう（Vgl. II, 62; XXXV, 477; Cairns 1976, 91）。因みに〈神秘主義〉が非現象学的な立場であるか否かは、フッサールからすれば「視ること」による検証を通じてはじめて決定することができる問題である。

とはいえ、フッサールは「直観」を、いわば〈恩寵の光〉として承認することをわれわれに要請しているのではない。既に確認したようにフッサールのいう「直観」とは「理性」、要するに〈自然の光〉のことである。フッサールは「観る認識」としての「理性」は「自己所与性」という「様態」で与えられるとするのである。そして、その「自己所与性」は①「視ること」において「このこれ」として与えられる事実的な「体験」の遂行にもとづいて②それ自身が再び「反省（Reflexion）」としての「視ること」に与えられる限りで「絶対的所与性」として「構成」されるものとされる（Vgl. II, 31）。要するにフッサールは、「視ること」そのものが更に「視ること」のうちに与えられ、「構成」されているということを疑いえない「絶対的所与性」であるとするので、彼の現象学自身の正当化をおこなっているのである。そして、これは哲学的論証（悟性）によってではなくフッサールのいう意味での「直観」によってはじめて得られる洞察である。というのも、①「体験」の遂行は事実的所与性であるし（＝遂行されないという可能性を排除しない）②「視ること」を「視ること」自身において「視る」とされる「反省」の主張は、〈何か〉、つまり自身とは異なる何か対象的なものを「視ること」であるとする通常の「視ること」の理解を超えており、その限りでフッサールの主張は「悟性」を超えた「直観」の承認を要

求するものであるよう思われるからである。明証が与えられているという事実はフッサールにとってはこれ以上論証できないという意味で「絶対的自明性」であり、よって彼自身この主張を「現象学的直観主義」と呼んでいる (Vgl. XXXV, 476ff.)。この「現象学的直観主義」とは、いわば「絶対的自明性」の自覚という〈驚きの経験〉である。そして、この「絶対的自明性」を疑いえない「絶対的所与性」として承認することをわれわれに迫るためになされる具体的手続きをフッサールは「反省」として理解しているのである。

この絶対的に自明な「視ること」自身を、悟性を超えた理性という意味での「直観」という仕方により〈視よう〉とすること。そしてこの〈視ることを視ること〉そのものを「直観」のひとつの変様である「反省」として定式化したうえで、その正当性を要請すること。要するに、フッサールのいう現象学とは「視ること」の様々な結果——フッサールは理念的対象性から身体性に至る様々な事象を分析している——を記述し、同時に哲学的に正当化する論証に他ならないといえるが、現象学はその原理としての「視ること」そのものを「視ること」(=〈視ることを視る〉)が「絶対的所与性」であるという主張に依拠することで、自身の哲学的論証の正当性の全面的な承認をわれわれに迫るのである。これこそが、本論が捉えようとする限りでのフッサールが歩んだ〈最初の一步〉に他ならない。

紙幅の都合上、本論はこの〈始まり〉と〈最初の一步〉のゆくえを発展史的に限らず見届けることはできない。しかし、フィンクの『第六省察』へのコメントのなかでフッサールは本論のいう〈視ることを視る〉と同内容のテーゼをより具体的に展開しているので、その確認で以て本章の考察を終えたい。

「超越論的主観性」は、自身がおこなう「自己省察」によって「展開・開示 (entfalten)」された構成的な根源としての「超越論的構成 (= 視ること)」を「既に構成された世界 (= 視られたもの)」に「意味付与」という仕方ですべて「投影 (hineinprojizieren)」(=「投影」することで視ることを視る) しているとフッサールはいう (Vgl. Dok. II/1, 213)。この「投影」することが「現象学する作用生」の営みであり、「既に構成された世界」に「意味」として「投影」された、いわば〈像〉が獲得されるべき現象学的分析の「成果」である (Vgl. Ebd.)。そもそも、「超越論的主観性」は、それ自身「純粹かつ絶対的な自己省察」としての「現実的かつ可能な反省の反復可能な無限性」、すなわち「視ること」の変様としての反省によって展開・開示される (Vgl. Ebd.)。この限りで、「超越論的主観性」とは、「絶対的自明性」としての「視ること」自身が遂行する内的かつ無限な反省という名の運動性を表す表題であると理解できるであろう。「反省」としての「視ること」は視ることそのものを視ながら、その「意味 (Sinn)」⁷を無限に記述し続ける。フッサールにとっては「視る眼に言葉を委ねるこ

7. フッサールにおける意味概念の刷新については以下を参照：III/1, 120f.

とこそが秘伝中の秘伝」(II, 62)なのである。この理性による無限の運動性こそが、先に確認した優れた意味での「直観」、即ち「悟性を理性へと導こうとする理性」に他ならないといえる。

2. もう一つの始まり～フインクのフッサール批判再構成と非存在的現象学のためのプロレゴメナ

既に前章で「明証」、「直観」あるいは「視ること」の絶対的自明性がフッサールの現象学が根づくエレメントであることを確認した。「視ること」はそれを〈生きる〉限りでのみ与えられるとされた。しかしながら、われわれは「絶対的自明性」を超えて、そもそもこの〈生きる〉とは何か更に問うことはできないのであろうか。もしそのような問いが可能であるなら、一体どのような現象学的分析によってこの〈生きる〉は解明されるのであろうか。これこそが『第六省察』において「超越論的生の二元論」(VI CM. 22)という表題の下、フインクが暗黙のうちに問うていた問題ではないかという仮説が本章の出発点である。フッサールは「原理中の原理」、われわれのいう「現象学的循環」に入り込むことにより、上記の〈生きる〉を絶対的自明性という名の始まりとして設定し、それに「直観」や「視ること」という名を与えた。これに対して、フインクはこの始まりそのものを相対化する。その具体的手続きとしてフインクが求めるのは、本論のいう〈現象学的循環〉に亀裂を入れることである。これをフインク自身の表現に置き換えれば「超越論的生」に「裂け目(Kluft)」(Ebd.)を穿つことである。〈現象学的循環〉の根本テーゼを〈視ることを視る〉に要約することができるのであれば、差し当たりはフインクが要請する「裂け目」を〈視ることは視ること自身を視ない〉というテーゼによって形式的に示唆することができるであろう。

2-1. 生の「絶対的自明性」の相対化

ところで、「明証」というエレメントが「真理の体験」(XVIII, 193)とされる限りで、それ自身「真理」とは区別されるべき「体験」についての考察を無視することはできない。フインクは、一般に「体験」に代表される「内的経験」とは自らを対象化する「対象経験」ではなく「遂行経験」であるという(Vgl. EFGA.3/2, 50)。それでは「視ること」そのもの、その「遂行経験」はどのようにして現象学的記述の「対象」となるのであろうか。既に確認したようにフッサールの根本的な戦略は「視ること」そのものを「視る」現象学的な反省に他ならない。ここでは、この反省を単純に「現象学的知覚」(XXIV, 371)等の仕方では規定するだけでは不十分であり、それが同時に「意味付与する能作」であるということをおぼえてはならない。フッサール現象学は「超越論的主観性」を単に現象学的な仕方では「知覚」して満足しない。

むしろ、その「意味」を記述することこそが哲学としての彼の現象学の営みである。しかしフランクは同じ箇所「反省」は決して「遂行経験」を「主題化」することはできず、それを「強化するある種の仕方」でしかないという (Vgl. EFGA.3/2, 50)。これまでに公刊された著作及び草稿を確認した限りでは、「遂行経験の強化」に関してより具体的な考察をフランクは遺してはいないが、われわれは一步進んでフッサールのいう反省は、本来対象化し得ないはずの「遂行経験」を、先に確認した「投影」としての反省によって「対象」として「見る」というある種の誤りに陥っていないであろうかと問うことができる。より具体的に言い換えれば、フッサールが「見る」のは「見ること」そのものや〈生〉そのものではなく、それらの〈像〉にすぎないのではないかという疑問である。確かに、それらの〈像〉が〈写像〉である事を論証することができれば、その〈写像〉が指示する「生」、「見ること」あるいは理性としての「直観」の事実性を「絶対的自明性」としてわれわれは承認することができるだろう。しかし、それが不可能であれば、彼が反省によって視ているのは〈仮象 (Schein)〉にすぎないということとなる。因みに、ここでいう〈仮象〉とは存在しない指示対象をあたかも存在しているかのようにみなす〈自覚を欠いた錯覚〉にわれわれを導く〈みせかけの写像〉のことである。

しかし、フッサールはこのような〈反省の像性〉に関する問いを表だって立てずに、「無限の反省性」をかなりの程度素朴に信奉しているよう思われる⁸。むしろ彼にとっては、既に構成された生から構成する生への反省を遂行する為には、「生」はすでに世界構成のプロセスのうちで〈生きられた〉ことは絶対的な自明事でなければならなかったのではないだろうか。〈生きられたこと〉や〈視られたもの〉は既に〈生きること〉や〈見ること〉、即ちそれらの「遂行経験」を前提としているであろう。〈生きられたこと〉を「既に構成された世界」という名の〈スクリーン〉に「投影」しながら〈見ること〉。そこに映し出された〈像〉に魅せられたフッサール。彼が「遂行経験」としての〈生きること〉を、それ自身は反省を拒む「絶対的自明性」であるとする理由はこのように推測することができるであろう。

2-2. 反省とエポケーの反復可能性をめぐるフッサールとフランク

このように「投影」 (= 像化) というモデルに暗に依拠するよう思われるフッサールの反省論は、超越論的反省とその対象としての「超越論的主観性」の構成プロセスそのもの間に成り立つ一種の可逆性、正確には反復可能性を前提としてはじめて成立する。既に生きられたプロセスを反省するというのは、記録映画のフィルムの逆回しのようなものである。「既に構成された世界」という名の〈スクリーン〉に

8. とはいえ、反省・自我分裂の無限退行というアポリアとの格闘は、フッサールが本論のいう〈像性〉という問題に不安を抱いていたことの証左といえる。Vgl. z. B. VIII, 88ff.

「投影」されたフィルムの逆回しだから〈反復可能〉なのである。とはいえこの比喩は〈直感的〉なものにすぎない。本論では試みとしてこの比喩をフッサールの『イデーナ I』及びフッサリアーナ 23 巻のテキストにおける「直観的 (anschaulich)」意識分析の用語によって〈翻訳〉することで少しでも事象への接近を図りたい。

①フッサールのいうエポケーが存在措定を「括弧に入れる」ことを要請する限りで (Vgl. III/1, 65) 「無限の反省性」は定立的意識ではなく「中立性変様」(Ebd. 247) を経た意識であると〈翻訳〉できる。この中立性変様の遂行は「無条件に自由な恣意」(Ebd. 249) に基づく⁹。

②「無限の反省性」が反復可能とされる限りで、「単なる思想」(Ebd.) に代表される端的な「中立性変様」ではなく、「《定立的》準現在化の中立性変様」(Ebd. 250) としての「中立化された想起」(Ebd. 251) あるいは「想像変様」として〈翻訳〉できる (Vgl. Ebd. 252ff.)。

③しかし、「無限の反省性」が行う「投影」は「既に構成された世界」という〈スクリーン〉を前提とする。よって「無限の反省性」は端的な「想像変様」ではなく、〈キャンバス〉や〈スクリーン〉といった知覚された事物 (いわゆる像事物) が「像化 (verbildlichen)」される「物理的像統握」(Vgl. XXIII, 25)、つまり「像意識」として〈翻訳〉されるべきである。

「絶対的自明性」とされる「遂行経験」を「像意識」という仕方で無限に反復し取り返すこと。もう一度〈直感的〉に言い換えるならば、それは〈生〉の「遂行経験」という名の〈舞台〉をフィルムに焼きつけること (エポケー／中立性変様の遂行)。それを〈スクリーン〉に「投影」すること (反省／像事物の像化)。そして、映し出された〈像〉を無限に繰り返し「視ること」。要するに、かつて演じられた「遂行経験」という名の〈生の舞台〉を狂おしいまでに取り返そうとすること (反省／像意識の反復)。しかし、このような〈反省／像意識の無限の反復〉によって本当に「遂行経験」を取り返すことができるか否かは必ずしも明瞭ではない。フッサール自身はこのような〈反復〉には、反省が対象化する「主題的な拡がり」から退く「現象学する営み」という「匿名的な深さ」の次元が不斷に付きまとうという (Vgl. Dok. II/1, 204)。よって、その取り返しは「無限の理念」(Ebd.) であり、無限の〈高次の反省〉なのである。つまり、フッサールの反省の理念には「匿名的な深さ」という名の〈影〉が付きまとう。「視ること」や「理性」の光で限なく〈影〉を照らし出そうとすればする程に、その〈影〉はより深くなるばかりではないだろうか。

これに対してフィンクは「超越論的生の二元論」という表題の下で、フッサールにおける〈現象学的循環〉あるいは〈明証の一元論〉にもとづいたエポケー・反省

9. フッサール自身、『イデーナ I』では現象学のエポケーにおいては「あらゆる措定もしくは判断はまったく自由によって変様される」(III/1, 65) という。

論をその内的な可能性に即して限界まで突き詰めることで結果としてフッサールの反省論を転倒しているよう思われる。まずはフィンクのいう「超越論的生の二元論」の内実の確認から始めたい。

フッサールのいう超越論的主観性の「生」とは世界構成的な生であり、「世界終局的な生の傾向」(VI CM. 26)である。「明証」あるいは「視ること」はこの傾向性のエレメントとして現象学的分析の対象なのだが、また同時にフッサール現象学の方法論的な「原理」としての「原理中の原理」(〈視ることを視る〉)としても機能していることから、本論は〈現象学的循環〉、〈明証の一元論〉という概念を導入したわけである。フィンクはこのふたつの機能をひとつのエレメントに解消するのではなく、そもそもふたつの機能を記述する為には別々の「生」概念が必要であると説く。フッサールの表現に置き換えるなら、「主題的な広がり」と「匿名的な深さ」そのものが、別々の「生」概念を要求する事象なのである。よって「超越論的生の二元論」が要請される。この二元論は「超越論的構成の主体」としての生とその構成の過程を記述する「傍観者」の生の二元論である¹⁰。即ち、「構成する生」が、まさに世界を構成する限りで「世界終局的な生の傾向性」(VI CM. S. 26)、つまり「世界信憑」のうちにその記述の本質を有することとなるのに対して、フィンクは「傍観する生」の記述の本質をこの「傾向性」を「へし折ること (Umbrechen)」(Ebd.)、つまり「エポケー」することに求める。この「へし折ること」が可能となるのは、武内大の適切な比喻を借りれば、「傍観する生」が「視ること」そのもののいわば「盲点」(武内 2010, 34)だからである。「盲点」、フッサールのいう「匿名的な深さ」そのものがはじめてフィンク的な徹底化されたエポケーを可能とする。個別具体的な「視ること」が、それ自身個別的な対象や表現の真理性を疑い「括弧に入れる」ことは現象学的エポケーではない。それは個別の真理をより適切な真理へと導く為に理性が遂行する「真理の様相化 (Modalisierung)」である。この様相化は「世界信憑」を生きているのである。先に確認したフッサールの反省理解もまた、それが特殊な、つまりある種の〈写像的〉な「像意識」として〈翻訳〉可能である限りで、この「真理の様相化」という〈明証の媒体〉に浸っているものと思われる。われわれが〈明証の一元論〉という表現を導入したことを思い起こしたい。これに対して、そもそもフィンクのいう「現象学的傍観者は未だかつて世界信憑を生きたことがない」(VI CM, 46)。エポケーする生とは個別の様相化を生きる「世界終局的な生」ではなく、ましてやその総体などでもない。「傍観する生」は決して視られることのない「盲点」、その限りでの「匿名的な深さ」であるからこそ(世界終局的な生としての)「視ること」がもつ「傾向性」そのものを「へし折ること」、つまり「エポケー」することが

10. しかし、フィンクは二つの「生」を実体的に区別したのではない。フッサールがいうようにそれは背理である (Vgl. Depraz 2002, 51)。

できる。これが「超越論的生の二元論」の根本洞察である。フッサールを反省という名の「視ること」の〈無限の反復〉へと駆り立てる「匿名的な深さ」。これを〈スクリーン〉に「投影」し、「視ること」によって征服しようとするのではなく——そのような「視ること」は「真理の様相化」という〈理性の生〉に導かれている——まさに〈匿名的な深さ〉が〈不可視の深さ（＝武内のいう盲点）〉であることを〈自覚〉することこそが「エポケー」における「秘伝中の秘伝」であるとフィンクは説いているのである。「超越論的生の二元論」における生概念の厳格な区別とは超越論的生自身に穿たれた「裂け目」である。

フィンク的な「へし折ること」としてのエポケーはフッサールの理解とは異なり原理的に反復不可能である。一度へし折られてしまったものは原理的にはもう元には戻らないし、われわれはもはや映画館に座って在りし日の〈生の舞台〉に熱中することもできない。このような議論自体がフィンク的なエポケー理解からすれば既にナンセンスである。というのも「裂け目」の復元、つまり「裂け目」への高次の反省を反復は差し当たり大きく分けて二つのやり方で遂行可能であるよう思われるが、フィンクは以下に確認するように二つの解決策を共に拒絶するからである。①

「裂け目」を、「真理の様相化」という媒体のなかに「投影」することで反省し「裂け目」を塞ぐという戦略。②エポケーをもう一度エポケーすること（＝エポケーをやめること。エポケーの反復としての〈エポケーのエポケー〉）で、そもそもの「裂け目」をもう一度塞ぐという戦略。しかし、第一の戦略は〈傍観する（エポケーする）生〉が「盲点」であるという〈不可視性〉をそもそも捉え損なってしまうので、『第六省察』でフッサールの「現象学の現象学」という理念の独自の具体化を目指すフィンクにとってはそもそも思いも浮かばない類のものであったよう思われる

（Vgl. z. B. VI CM, 29）。既に確認したように、フッサールの根本戦略はこの第一の解決策であるといえる。第二の〈エポケーのエポケー〉という戦略も、実はフッサールが暗に提案しているものといえるが（Vgl. Dok II/1, 191; Luft 2002, 257）フィンクからすればこれはナンセンスである。というのも、仮に〈エポケーのエポケー〉なるものを遂行するのであるとするならば、現象学者は〈第一のエポケー〉によって得た「超越論的認識」の遂行とその表現としての「現象学的な文章」をきれいに清算して、「自然的認識」及び「自然的言語」へと連れ戻されることとなる（Vgl. VI CM, 101f.）。つまり、第一のエポケーによって得られた〈現象学することの成果〉としての「超越論的認識」を、現象学者はきれいさっぱり〈エポケーのエポケー〉によって忘れ去ってしまうこととなるとフィンクは考えたといえる。よって「（※超越論的認識の遂行を）やめてしまった者（※本論のいうエポケーのエポケーを遂行した者）は、まったくもって現象学的な文章を理解しない」（Ebd.）とフィンクは断言する。言い換えれば、〈エポケーのエポケー〉をしてしまったのでは、そもそも現象

学の存在そのものが忘却されてしまうというのがフィンクの考えであり、よって現象学者がこれを遂行するなど彼からすればナンセンスなのである。

われわれは既にフッサールの反省概念を反復可能な「像意識」という直観的意識分析の用語に〈翻訳〉した。〈エポケーのエポケー〉を認めないフィンクによる現象学的エポケーの理解を同様の仕方でも〈翻訳〉すれば、反復不可能な「中立性変様」、「単なる思想」のようなものとして差し当たり理解できるであろう。端的な「中立性変様」にとって「理性と非理性への問いは意味を持たない」(III/1, 249)のであるから、フィンク的なエポケーはフッサールにおける「理性」がもつ「世界終局的な生の傾向性」を「へし折ること」ができる。エポケーは超越論的生自身に修復不可能な「裂け目」をこじ開けるのである。そして、このフィンク的理解に従った反省が反復不可能(=フッサールの「投影」による高次の反省の反復及び〈エポケーのエポケー〉の遂行が不可能)であるのは、端的な「中立性変様」を反復することがわれわれの意識にとって全くのナンセンスであるのといわば同様のことである。「生」に対してその傾向性を「へし折ること」。「理性」の次元に対する「理性と非理性への問いが意味を為さない」次元。そして「視ること」とその「盲点」。これらの対立は「理性」の「様相化」とその「中立性変様」というモデルに〈翻訳〉できる。よって「反復可能な反省の無限性」を信奉するフッサールはフィンク的なエポケーが生に穿つ「裂け目」とそれにもとづく「超越論的生の二元論」を〈視る〉ことはなかったはずである。というのも「裂け目」は〈不可視〉だからである。〈盲点を視る〉というのは、何らかの仕方でも「投影」された〈像を視る〉ことであり、そもそも視ることのできないものを無自覚に像化する際に問題となる〈像〉とは、「想像」あるいは映画のような「像意識」というよりは、端的に〈みせかけの写像〉としての〈仮象〉であるとする方が事象により即しているであろう。このようにフィンクは恐ろしく徹底的な仕方でもフッサールのエポケー・反省論を批判、拒絶しているといえる。

それではフィンクは「傍観者の生」という「盲点」の不可視性、その「匿名的な深さ」に自足するだけなのであろうか。もしそうであれば、フィンクの振る舞いは何も〈視ず〉、何も〈語らない〉「黙せる賢者もしくは聖者」(Luft 2002, 219)のそれであって、もはや哲学的なものとはいえないであろう。以下、フィンクの着想が決してこのような自足した態度に陥らないものであることを本論は示す。つまり、上で確認したフッサールの二つの解決策に解消されない第三の道へと踏み出すことこそが「超越論的生の二元論」に課せられた本当の課題なのである。

2-3. 反省の像性と仮象の「生産」

「超越論的生の二元論」にとっての本当の課題は、本来的には反復不可能なエポ

ケーをいかに〈みせかけ〉のうえで反復するのか¹¹、つまり不可視の「盲点」とそこに映し出されたものを如何に〈みせかけ〉のうえで「視ること」へともたすのかという問題である。フィンクはこの第三の道を「現象学することの〈非本来的（二次的）世界化〉」（VI CM, 120）と呼ぶ。「超越論的生の二元論」にもとづいたエポケーと反省理解ではその反復が不可能である限りで「非本来的世界化」とは〈仮象〉に他ならない。しかし、既に確認したように「超越論的生の二元論」こそが、フッサールの反省がもたらす〈像性〉が〈仮象〉であることを見抜くのである。よってフィンクのいう「非本来的世界化」という〈仮象〉は、〈自覚を欠いた仮象〉ではなく、〈見抜かれた仮象〉あるいは「自覚された仮象」（Luft 2002, 264）でなければならない。フィンクはこの問題の解明を「〈現出（*Erscheinung*）の真理〉と〈超越論的真理〉の区別における現象学的理性のカノンとしての超越論的方法論」（VI CM, 121）の課題とみなす。これこそが「傍観者の〈生産的〉経験」（Ebd. 90）の解明という課題である。先に確認したように、フィンクのいう「傍観者の生」は「未だかつて世界信憑を生きたことがない」にもかかわらず何かを〈視る〉し、また何かを「生産的」に〈語る〉のである。

フィンクは「ムンダンな先所与性」にもとづいてなされる「理念化（*Ideation*）」は「想起（*ἀνάμνησις*）」であるとし、その限りで「受容的（*rezeptiv*）」なものにすぎないとする（Vgl. Ebd. 91ff.）。よって、あらゆる「ムンダンな先所与性」を反復不可能な仕方ですべて「エポケー」することで、生の「傾向性」を「へし折り」、生自身に修復不可能な「裂け目」をこじ開けてしまった「傍観者の生」が更に何かを視、それを語るができるのであれば、誤解を生みやすい表現ではあるがフィンク自身がいのような「生産（*Produktion*）」もしくは「創造（*Kreation*）」という仕方ではない（Vgl. Ebd. und Fink 1966, 143）。この「生産」はいかなる「ムンダンな先所与性」にももとづかずに自身の「理念化」を遂行する。よって「傍観者の〈生産的〉経験」とは〈指示対象〉も〈原像〉も持たない〈純粋な像〉、つまり「自覚された仮象」の「生産」なのである。

このような〈純粋な像〉としての「自覚された仮象」の「生産」として「傍観者の〈生産的〉経験」を解明するフィンクの着想は、フッサールの反省・エポケー論がもつ〈みせかけの写像〉、〈自覚を欠いた仮象〉という性格を洞察し（そして恐らくはフッサールの理性理解をも相対化し¹²）、その囚われから逃れる可能性をわれ

11. ルフトはこの反復の問題を「自我分裂の高次の反復」として捉え、これがフッサールとフィンクにとって持つ意味が全く違うことを確認している。つまり、フッサールはこの「自我分裂」を無限に反復可能だとし、フィンクは「高次の反復」という理念を〈みせかけ〉のものとする（Vgl. Luft 2008, 177ff.）。

12. ルフトもフッサールの「啓蒙主義」という観点から類似の見解を示している。Vgl. Luft 2002, 292f.

われに与えるというメリットを持つ。しかし、フィンクの歩みはこれに尽きない。彼はこの〈純粋な像〉の可能性の条件を問うことで更なる一步、つまり〈最初の一歩〉を踏み出したようわれわれには思われるのである。

2-4. 非存在的現象学への「窓」

私見によると、フィンクにおける〈像〉への問いとは〈像〉そのものへの問いというより、その〈像〉の現出を可能とする「媒体 (Medium)」への問いである (Vgl. 池田、準備中)。よって「傍観者の〈生産的〉経験」が生産する〈純粋な像〉の超越論的な可能性の条件への問いとはその「媒体」への問いであるといいたい。それではその「媒体」とは何か。結論からいえば、「傍観者の〈生産的〉経験」の媒体とは、「世界信憑」を「へし折ること」としてのエポケーによって得られるフィンクがいう意味での「世界現象 (Weltphänomen)」 (Fink 1966, 136, 170) に他ならない。以下その理由を説明しつつフィンクの「超越論的生の二元論」にもとづく現象学の構想を「非存在的現象学」として定式化することで本論を閉じたい。

フィンクは処女出版である『準現在化と像』 (Fink 1966, 1ff.) において、絵画鑑賞など普通の意味での〈像意識〉を記述するが、その際に像を眺める現実の人間としての「像の観察者 (Bildbetrachtender)」、キャンバス等の「像の担い手 (Bildträger)」、そして描き出された対象 (例えばホドラーの「木こり」のような「非現実」の対象) が属する「像世界 (Bildwelt)」という三つのエレメントを摘出しているといえる (Vgl. Fink 1966, 67ff.)。注目すべきは、フィンクが〈描かれた対象〉そのものとしての「像客観 (Bildobjekt)」 (Vgl. XXIII, Nr1.) ではなく、その対象が属する「像世界」を記述の主題とする点である。ところで、フィンクの像意識分析は「非現実性を持つ現象学的意味」 (Fink 1966, 67) の解明であるが、その根本動機は「志向された対象そのものの存在に…中略…含みこまれている〈非存在 (Nichtsein)〉」としての「非現実性」のもつ〈非性〉を「否定の無」から区別することである (Ebd.)。この「非存在」が承認されれば、フィンクのいう「〈仮象〉の構成 (Konstitution vom Schein)」を「みせかけの構成 (scheinbare Konstitution)」から区別することができる (Vgl. Ebd. 68ff.)。即ち、「仮象」は単なる「否定の無」という様相化にもとづく形式的な〈現実の裏返し〉のようなものとして構成されているのではなく、恐らくはある種の「無限判断」にもとづく「現実」に対する「異他存在 (ετερον)」として自身に固有の事象内容を伴った仕方で構成されていることとなる¹³。このような「非存在」として「仮象」が構成されているとフィンクがいう限りで、「像の担い手」および像の「観察者」は端的に「存在」として構成されるものといえる。よって、フィンクは「存在」と「非

13. フィンクにおける「無限判断」の扱いは以下を参照: EFGA. 3/1, 246; 武内 2010, 23ff. 池田 準備中。

存在」を区別するそれ自身記述的・現象的な概念として、いわば〈端的な世界〉に対する「異他存在」としての「像世界」という用語を用いるのである。そして「像世界」の構成は「反復可能」である (Vgl. Ebd. 72)。つまり、「観察者」にとって「像の担い手」が「像世界」へと開かれた「窓」(Ebd. 77) であるように、「像世界」に属する主体 (ホドラーの「木こり」) は、「像の担い手」を通じて〈端的な世界〉に属する「観察者」へと開かれている (Vgl. Ebd. 78)¹⁴。「窓」とは、本来的にその構成が〈反復可能〉な「像世界」の「媒体」なのである。「像世界」とは、それ自身「存在」する〈端的な世界〉に属する「像の担い手」を自身の現出の「媒体」とする「非存在」の世界である。

それでは「傍観者の〈生産的〉経験」が生産する〈純粹な像〉も同様に、自身が属する「像世界」及びそこへと開かれた「窓」を持つのであろうか。答えは否である。「傍観者の生」はそれ自身、反復不可能なエポケーによって切り裂かれた修復不可能な生の「裂け目」である。「裂け目」としての「非存在」は反復可能な様相化全てに対する「異他存在」としての「非存在」である。よって、その裂け目自身が属する世界というのを想定するのであれば、それは「絶対的体験流」の構成分析をはじめて可能とする「窓」としてフィンクが示唆だけした「絶対者への窓」(Ebd. 18) を更に超越する、いわば〈絶対者のなかの窓〉とでもしか名付けようのないものをこじ開けなければならない。しかし、フィンクは「世界」をいかなる仕方 (理念的、実在的等) であっても「超越」する「絶対者」を「構成」することを「独断論」として切り捨てるので (Vgl. Fink 1966, 101ff.) このような「窓」は認められない。本論は〈絶対者の超越〉という理念が、〈反復不可能な裂け目〉を自覚を欠いた〈反復可能な仮象〉として構成してしまうことで「超越論的仮象」に陥ることとなる点にその理由を求めたい¹⁵。反復可能な存在 (人間としての「観察者」やキャンパス等の「像の担い手」) が属する〈端的な世界〉が反復可能な「像世界」の媒体、つまり「窓」であることにアナロジーを求めるなら、「ムンダンな先所与性」としての「世界」のフィンクの〈反復不可能なエポケー〉を通じて生産 (!) される「現象としての世界」(Fink 1966, 136) こそが「傍観者の〈生産的〉経験」の「絶対的媒体」(Fink 1958, 120) であるといえる。「現象としての世界」あるいは「世界現象」への「窓」とは「傍観者の生」としてのみ思考可能である。しかし「傍観者の生」とはその構成が〈反復可能〉な「像世界」の「媒体」である「窓」というより、既に確認したように〈反復不可能〉な仕方では超越論的生自身に穿たれた「裂け目」である。「世界現象」は「裂け目」は持つが、「窓」は持たない。このことは「世界現象」は自身の「異他

14. 因みに、フッサールも全く同様の洞察をしている (Vgl. XXIII, 30)。

15. ここで本論は意図的にフィンクにおける「超越論的仮象」理解を事柄に即して補完した。フィンク自身による明示的な「超越論的仮象」概念の用法に関しては以下を参照：Fink 1966, 153ff.

存在」としての「像世界」を持たないことを意味する。だからこそ「世界現象」は〈唯一絶対的〉(＝絶対的媒体)なのである。「世界現象」というフインクの現象学が「視る」〈純粹な像〉としての「自覚された仮象」は、それ自身が「媒体」としての「世界現象」に映し出される。これこそが「超越論的生の二元論」という「裂け目」が「生産」した〈純粹な像〉、「自覚された仮象」である。現象あるいは生の内的な差異性こそが現象学が分析する現象を「生産」する。生の「絶対的自明性」ではなく、「世界現象」の〈唯一絶対性〉から出発する限りでのみ、フインクが示唆する「世界現象のロゴス(※世界のロゴスではない)」(Fink 1966, 170)を探求する学としての現象学、そして「世界の根源」(Ebd. 101)の解明としての超越論的現象学という〈最初の一步〉を追遂行・再構築することができる。フインク的な現象学は「世界現象」を超えた何ものをも問わず、もはや現象としか呼べない現象を分析する。繰り返すがフインクにとって現象学とは徹頭徹尾現象自身の内的差異性にもとづいて遂行される現象の分析の学なのである。そして、この「世界現象のロゴス」の探求が〈生の「裂け目」〉としての「非存在」を不断の同伴者とする「超越論的生の二元論」を自身の根本経験(＝哲学の始まりとしての驚きの経験)とする限りで、フインクの構想を「非存在的現象学」と定式化することができるであろう。本論はひとつのプロレゴメナにすぎないのであるから、この確認を以て稿を閉じるものとしたい。

文献一覧

Husserliana (Den Haag/Dordrecht 1950ff.) からの引用は、ローマ数字によって巻数、アラビア数字によって頁数のみ示し、当該の巻の書誌情報の明記は省略する。*Husserliana Dokumente* (Den Haag/Dordrecht 1977ff.) は Dok. と記したうえで、数字に関しては *Husserliana* からの引用と同様の形式に則るものとするが、引用の著者がオイゲン・フインクである場合のみ、便宜上 VI.CM という略号、アラビア数字によって頁数を示す。*Eugen Fink Gesamtausgabe* (Verlag Karl Alber, Freiburg/München, 2006ff.) からの引用は、先頭に EFGA. という略号、巻数、頁数の順で示し、書誌情報は省略する。

Cairns, Dorion: *Conversations with Husserl and Fink*, The Haag, Martinus Nijhoff, 1976.

Depraz Natalie: „Zur Ontologie der Inter-Individuation. Husserl zwischen Fink und Landgrebe“ in: *Lebenswelten. Ludwig Landgrebe-Eugen Fink-Jan Patočka Wieber Tagungen zur Phänomenologie 2002*, hrsg von Helmuth Vetter, Frankfurt am Main, 2003, 45-53.

Fink, Eugen: *Sein, Wahrheit, Welt, Vor-Fragen zum Problem des Phänomen-Begriffs*, Den Haag, 1958.

—: *Studien zur Phänomenologie 1930-1939*, Den Haag, 1966.

—: *Nähe und Distanz, Phänomenologische Vorträge und Aufsätze*, Freiburg/München, 1976.

Ikedo, Yusuke: 「アンリとフインクにおける現象概念の展開について」、準備中。

- Luft, Sebastian: *Phänomenologie der Phänomenologie, Systematik und Methodologie der Phänomenologie in der Auseinandersetzung zwischen Husserl und Fink*, Dordrecht/Boston/London, 2002.
- Rosen, Klaus: *Evidenz in Husserls deskriptiver Transzendentalphilosophie*, Meisenheim am Glan, 1977.
- Takeuchi, Dai: 『現象学と形而上学——フッサール・フランク・ハイデガー——』知泉書館、2010。